

---

# ドライブ・ナイツ

蜜柑

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ドライブ・ナイツ

### 【Nコード】

N3905X

### 【作者名】

蜜柑

### 【あらすじ】

母なる銀河に戻るために作られた人型宇宙探査ロボット「ドライブ・ナイツ」

それでも、地球も私たちの知る太陽も見つからない。

ただ帰りたい一心で作られたDNは、帰れない諦めの中で歪み、戦争の道具でしかなくなっていた。

## ノアの箱舟（前書き）

ずっと前に書いていたロボットバトルものをもう一度設定等修正して書かせていただきました。

幼稚な作品ですが読んでいただけたらと思います。

## ノアの箱舟

消える瞬間は突然だった。

気づいた時には、太陽は私たちの知る太陽ではなくなっていた。

第二宇宙と名付けられたこの世界は火星とその周囲の星を飲み込み自身の一部とした。

火星圏の全ての人々を連れたまま・・・

なにもかもがわからない。

私たちの住んでいた銀河に戻る方法も。

ここがどこかさえも。

だから人々は開発した。

宇宙開拓用の人型ロボットを。

母なる銀河に帰るために。

それが、DNドライブ・ナイツの始まりだった。

初の一人乗りDNホープは宇宙を飛び続けた。

しかし、我々が第二宇宙に飲み込まれて200年がたとうとする今でさえ

我々は帰れずにいる。

ここは第二宇宙。

人は世代を重ね。

ここで生まれた人々ばかりになったこの世界は、帰ることを諦めていた。

この世界で生きると決めた。

しかし、人々は人種の壁も隣人との壁さえもをこえられなかった。この世界でも、人は戦うことを忘れず、奪いあって生きていた。

第二宇宙における世界大戦。

宇宙において圧倒的性能を持つドライブナイツを用いて・・・

「始めようか！選定を！」

## 第三世代 エス

タレス基地

軍事企業フィフスアークの所持するドライブナイツ試験用基地である。

見慣れないDNがいるのはいつものことだった。

しかし、今回の機体は存在感が違う。

全身白はカラーリングが終わっていないからだろうか。

高さは23メートル、DNの平均は25メートル。多少小柄に見える程度だ。

シルエットも対して目立った特徴はない。

しいていうなら、アンテナやカメラが最新型で多めに取り付けられているように見える。

武装も今ひとつパツとしない。

ビームのアサルトライフル。量産型DN「N07J型」の標準装備と同じものだ。

ビームソードも同様に流用のもので、特徴といえるものはビームダガーくらいと言える。

電源を搭載しているため、投擲武器として使用できる。

そんな平凡にしか見えない新型DN「エス・ケラーテ」は、初の第三世代と呼ばれるDNとして開発された。

その特徴はソフトウェアにあった。

パイロット支援のアニマルAI「エス」の搭載である。

エスは猫型AIであり、学習能力があった。

これを成功させ、第三世代として普及、支援AIの独占による市場の制圧がフィフスアークの目的である。

「試作一号機の試験をはじめます。スパルナ大尉カタパルト1から

発進を」

「了解 ケラーテで出すぞ」

第三世代が白い閃光となって宇宙へ飛び立つ

「スバルナ大尉 聞こえるか」

「また秘密の話ですか 中将」

「・・・相手は傭兵だ。殺してかまわん。第三世代の実力をだしきれ。コンペで勝たせるためにな」

「了解。武装はたいしたことないが機動性能は良い。コクピットに一発ずつ叩き込んでやるよ」

試験区域には既にN07F型が5機待ち構えていた。

「リーダー機から全機。これより試作一号機との戦闘にはいる。大事なテスト機だ。大破させるな」

「たまたまリーダー機の奴が命令してんじゃねえよ」

「・・・」

リーダー機の傭兵パーシバル・クロイツェルは深いため息をついた  
「負けるためのテストだから仕方ないか」

## 小さな戦争

「きたぞ！」

傭兵の一人が叫ぶと同時に主装備のアサルトライフルを連射した。しかし、エス・ケラーテは既に射線からずれスラスターをさらにかしていた。

「あたれつての！」

二機の攻撃をかわし間合をつめる。

パーシバル・クロイツェルは疑問を感じた。

「打ち返さないとテストにならないだろ・・・？」

その答えはすぐにでた。

「チェック」

エス・ケラーテのビームダガーが最初に撃った傭兵のコクピットを貫いていた。

「なっ！殺すための攻撃か」

パーシバルは即座に味方に通信をいれた。

「これはテストじゃない。敵は殺す気で来てるぞ。弾幕を張って試験区域から抜けるんだ。」

しかし、傭兵達は聞く耳を持たなかった。

「返り討ちにしてやる」

そう言ったパイロットは次の瞬間、光の中で蒸発した。

「さて、そろそろ第三世代のテストを始めるか」

スパルナはAIEsを起動させるスイッチを押した。

「エス起動。マスター確認。」

「パス確認完了。キャットタイプAIEs出現します。」

「マスター。戦争をはじめますか？」

「殲滅作戦だ。」

「了解。」

左腕が自動で稼働しアサルトライフルを撃った。

その弾はパーシバルのDNがさっきまでいたところを通過した。

「敵速度の入力を修正。」

「予測射撃適正化。」

アサルトライフルの銃口はまるで敵のDNと繋がっているかのような動きを見せた。

次の弾丸はパーシバルのDNの右手の装甲が薄い部分にあたり右腕を中破させた。

「未来予測射撃か。素直な奴だな」

「敵の攻撃能力40%の低下に成功。」

「狙うのはコクピットだ。」

「了解。」

再びアサルトライフルがパーシバルを狙う。

「甘い。予測と分かれば簡単によける。」

速度を落とし回避も三次元的に行うことで弾はパーシバルのDNに触れることができなかった。

「各機退避。時間を稼ぐ。」

「A I！逃げる奴からだ」

「了解。」

次の弾は逃げるDNの背中からコクピットを撃ち抜いた。

「敵コクピット破壊。生命反応なし。」

「いいぞ。次だ。」

「ターゲット捕捉。射撃開始。」

さらに攻撃をしかけるエス・ケラーテと狙われたDNの間にパーシバルは飛び込んだ。

「ペンタルフィールド緊急展開。」

DNの左手を前方に掲げると五角形のビームシールドが広がり弾を受け止めた。

テストのターゲットに装備されているようなものではない。

「あの的・・・スパイか」

「エス。あれを落とすぞ。」

「了解。左腕ソードの使用を提案。」

「黙って弾ばらまいておけ。」

「了解。」

エス・ケラーテは左腕でアサルトライフルを撃ちつつ右手からビームダガーを放ちパーシバルのDNに追い討ちをかけた。

「二機を相手にしてるようだ。ペンタルフィールドも持たない。」

パーシバルはスモーククラッカーをなげ撤退する。

定石通りスモークの中に機雷を撒くのも忘れない。

「スモーク内機雷確認。操作の一任を提案。」

「ふざけるな！俺に任せればいいんだよ。」

スラスターをさらにふかせながらスモーク内にエス・ケラーテを突撃させる。

送られてくる機雷の位置情報をもとに回避行動を続けスモークを突き抜ける。

しかし目の前にはパーシバルのDNの左手が待っていた。

## 学習能力

パーシバル・クロイツェルの操るDNの左手から再びビームシールドが展開される。

それに対して、スパルナはビームダガーで切り裂こうとした。

しかし、エス・ケラーテのダガーを持つ右腕はビームシールドに捕らわれ大破した。

「くっ！左腕操作返せ。」

そういいながらスパルナは距離を取るように後退させた。

「早くしろ。」

「データ収集第一フェーズ終了。エス最適化開始。」

「最適化完了。第二フェーズエス再起動。」

「えーい！」

スパルナはエスに電源を落とすスイッチを押そうとした。しかし、力をいれてもスイッチは機能しない。

「左腕返せ！」

「拒否。攻撃開始。」

エス・ケラーテは左腕にビームソードを展開された。

「接近戦の不利を理解しないパイロットだな。」

パーシバルは左手の盾でソードを受け流しながら盾で敵を引き裂く機会をうかがっていた。

エス・ケラーテが盾で弾かれた勢いをそのままに突きの姿勢に入る。パーシバルは絡めとるべくビームシールドを大きく展開させる。五芒星のように広がるそれはビームを掴むことができる。

エスは左腕に突きをはなたせる。

ビームソードに絡まるビームシールドが突く力を奪って行く。  
そして、パーシバルのDNの左手直前で停止した。

しかし、そこまでエスは計算していた。

ソードを掴んで動けない左腕に対して、腰から下に射出したビーム  
ダガーを蹴り上げ突き刺した。

「くっ！ペンタルフィールドが消える。」

パーシバルは即座に脚のシュトゥルムファウストを撃つ。

しかし、猫を思わせる動きで回避された。

打つ手は後退しか許されない。

エス・ケラーテは追撃を加えるべく追う。

トドメをコクピットにつきたてようとビームソードを構えるがそこ  
でとまった。

「試験区域からの撤退を確認。攻撃停止。」

「・・・」

エス・ケラーテのパイロットは既に気を失っていた。

## いつもと変わらない日常

「再び神の審判の時がおとずれます。神の救いの手は我々信徒にさしのべられるでしょう。さあ、神の声に耳を傾けるのです。」

火星は多くの国がそれぞれの領地を持ちそれぞれに支配していた。ここは大和という国の都市キョートシティー

「最近こういうの多いなあ」

「そうだね。何か悪いことが起きるのかもしれない」

「うーん・・・」

高校の制服を着た男女はそんな話をしながら帰っていた。

「ジグは神様信じてるの？」

「そういうわけじゃないけど。ヒイラギは信じないのか？」

「まだ見たことはないねー」

「見たら信じるのか？」

「見たら仕方ないよね」

「そうだな」

「よしっ 今日こそ誘おうー」

「とつところで ツッ ツキヨ！」

「ん？」

「これから俺とあそぶ」

「ごめん 今日は約束あるんだ」

「・・・そうか」

「じゃあ、また明日学校でね」

「・・・」

「今日もダメだった・・・だけど諦めないぞ！まだ明日も明後日もあるんだからな」

## 少女にとつての始まり

柊 月夜は高校3年生 将来の夢は未定

―だってそのほうが楽しいじゃない―

誰にでも優しく分け隔てなく接する女の子

実際、一緒に帰っていた少年―ジグリッド・ユアンは、大和人の父とスミノフ人の母のハーフで、周囲の人からあまりよく思われていないが、月夜だけは友達として仲良くしている。

そんな少女の始まってしまった日

それが今日10/23

「たっだいまー」

「おかえり 月ちゃん」

「今日は私のご飯当番だよ」

「月ちゃんの方が美味しいものね」

「へへ おまかせあれ」

早速、制服の上にエプロンを着て台所に立ち、トトトと気持ちよくジャガイモを切つてゆく。カレーを作らせたら三ツ星を自負している。

テレビの前でべたーと垂れているのは専業主婦 柊月読 元DN  
パイロット 家事全般苦手

娘のたてる音を愛してまったりするこの時間が大好きだ！ほんとに！

だから臨時ニュースの警報音に対してテレビをぶん殴った！全力で！音をたてなくなったテレビに満足していると携帯電話が鳴り響いたのでこっちも殴ろうと思った！着信音が夫だったので我慢した！全力で！

「月読！月夜はいるか！」

「今一緒ですよ」

「それじゃ約束のところに避難しなさい」

「！」

理由は聞かない。夫が言うのだからそういう時なのだ。

月ちゃんにガスの元栓から示させて、かねてから用意していた避難バックを背負い言った

「月ちゃん 愛してる」

いつだって全力だから後悔はしたくない

守る覚悟を決めてマンションの扉を蹴破った

全力で！

## 最初の逃走

目指す地点はマンションから2.3km  
最短ルートも何度も走ってチェック済  
家事をしない専業主婦の底力です！

「月ちゃん 大丈夫？」  
「うん いつもこれぐらい走ってるよ」

私は目的地までだいたい半分来たところで避難する理由を知った。  
この爆発音は量産型DNがよく使うアサルトライフルのカスタムで  
つけられるグレネードだ。

防衛する側である大和自衛軍の使うべきものではない。  
つまり侵略を受けココまで侵入されているのだ。

近くのビルが爆発、崩壊した。

土煙の中からでてきたDNは容赦無く逃げる人々に向けアサルト  
ライフルの弾をばらまいた。

人から見ればあまりの大口徑。死んだというよりも消えたという表  
現が適切だと思った。

きつと月ちゃんもみんな隠れられたと思っただろう。

でも月ちゃんだけは私を守る！

道路に倒れていたバイクを起こし、ついたままのキーをねじる。

大丈夫！生きてる！

敵のDNが私に気づいた。スミノフ製第二世代ネウストラシムイ。  
量産型アサルトタイプ。動きがぎこちなく不慣れなことがわかる。

「私に力を貸して！名も知らないバイク！」

月ちゃんを後ろに寄せ、アクセルを回す。

エンジンが暖まって敵がロックオンできるようになるのは知ってる。

経験の少ないパイロットに熟練者同様の性能を発揮させることをコンセプトにした第二世代DN。その特徴が熱源ロック式未来予測射撃。

正確な予測射撃は素人にありがちなばらまきよりも読みやすい。

バイクを自在に操り予測の位置をさける。

カーブの侵入速度もありえない域で倒れようとするバイクをさらにアクセルを回し無理矢理立ち上げる。

背中に感じる月ちゃんを全力で守り切るために危険域での走行を続ける。

道路を走る敵に加速を許さない細かいカーブでバイクを走らせる。

アサルトライフルの弾丸を避け続け目的地を目指す。

この時の私に誤算があったとすれば今回のスミノフ軍の侵攻作戦が本気だったと言うことだろう。

目的地の公園についた時には3機のDNに囲まれていた。

## セーミラズルシェーニヤの猛威

「ちょっとやばいかも」

本当は月ちゃんに心配かけたくないけどもらしてしまった言葉だった。

こう囲まれてしまっただけで誰でもピンチってわかってしまう。

月ちゃんだけでも逃がさないと・・・

敵はわざと弾を外して楽しんでいる。

「お母さん・・・」

「大丈夫！全力で絶対守る！」

敵は泣きも叫びもしない親子に飽きてきたようだった。

そして、踏み殺すことで決定したらしい。

足を高く上げて踏みおろした。

はずだった。

踏みおろす足がなくなっていたが・・・

一機がバランスを失って倒れるなか、残りの二機は周囲を警戒するも、次の瞬間には、コクピットが消し飛んでいた。

倒れたDNもとどめの一撃で動かなくなった

着弾地点を元に射撃地点を見ると、山の上で狙撃特化型第二世代DN雑賀・撃が手をひらひらと振っていた。

どうやら元同僚の誰かららしい。

とりあえずの安心を得て手を振り返そうとした。そんな場合じゃなかったのに

雑賀の周囲は真っ赤に染まっていた。

雑賀のパイロットも気づいたのだろう

慌てて紅い光から脱出しようと走らせたが、あまりに広い範囲の照射から逃げられない。

紅い道を追い掛けるかのように白い光が降り注ぎ、紅く染まっていた全てのものを溶かした。

スミノフ軍の最大戦力と噂される移動拠点グロースヌイ。超大型宇宙戦艦と言えはわかりやすいだろう。その最大の特徴はセーミラズルシェーニヤと呼ばれる7つの巨砲。

それがキョートシティーを狙い放たれたのだった。

全てを融解させ、蒸発させるだけで飽き足らず、空気を巻き込む莫大な熱量は周囲に嵐の様相を示す。

月ちゃんを庇った背中にいくつもの瓦礫が当たり肋骨が幾つか砕けた。

「月ちゃん！石が降ってくる前に、あの階段を降りるよ」

目的だった公園のトイレ

隠されていたその階段は既に剥き出しになっていた。

今やシェルターなど意味をなさない。

けど！ここには月ちゃんを守る希望がある！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3905x/>

---

ドライブ・ナイツ

2011年12月5日19時04分発行